

松坂市出身の越後人による不思議発見・お宝発見

「上越だより」

上越市本城町 下西 隆子（三重県松坂市出身）

榎原文書と榎原温泉

お正月の初詣を兼ねて、「射山神社」（津市榎原町）に行つてきました。帰省先の松阪の実家から、車で四十分ほど榎原温泉郷の中に、この神社はあります。

一月五日は、とても寒い日で、乾いた風に吹かれ、気温以上に寒さを感じながら参拝しました。雪国の湿った空気になりました。乾燥した寒風は、肌に刺されますが、雪国は、肌に刺さります。

榎原温泉郷に向かっていくと、北西方

面に見える布引山地には風車がある上

いました。背後に二千メートル級の山がある上越市の風景と異なり、布引山地は七百メートルから八百メートルの山々が十キロメートルくらい衝立のようになります。このあたり（青山高原）は風の道があるとかで、二つの風車施設（久居榎原風力発電施設・青山高原ウインドファーム）があり、設置さ

れている風車は二十基を越え、新しい風景を作っています。

「射山神社」は式内社（平安時代の延喜式に記載された神社）ですが、そのわりにこぢんまりしていました。神社の「縁起」によると、温泉大明神として射

山（貞石山）をご神体とし山中に社がありました。天正十六年（一五六八年）に現在の地に移されたとのこと。不思議なことに、新しい神社の近くにも温泉が出来るようになつたとか。境内の看板には、次のようなことが書かれていました。

榎原温泉郷に向かっていくと、北西方

面に見える布引山地には風車がある上越市の風景と異なり、布引山地は七百メートルから八百メートルの山々が十キロメートルくらい衝立のようになります。このあたり（青山高原）は風の道があるとかで、二つの風車施設（久居榎原風力発電施設・青山高原ウインドファーム）があり、設置さ

一志なる ななくりの湯も 君が為
恋しまずと 聞けばものうし

（源経信）

榎原温泉が恋の病をいやす「恋のパワースポット」ということで、境内にはハート型の絵馬がたくさん飾られていました。

なぜこの神社を訪ねたか、それは榎原藩の藩祖「榎原康政」の父祖の地である

藩の藩祖「榎原康政」の父祖の地である

からです。

平成二十二年七月から「榎原文書」藩政日記の解説ボランティアを始めて、一年半ほど経ちました。一グループ四人で、

『くずし字辞典』を繰りながら、以前の記事を振り返りながら、またインター

ことだけで、だれにもわからぬでしよう。

ネットで江戸時代の事象を調べながら、

翻刻（活字化）を進めています。初心者

の私はまだまだ、たどたどしい読みです

にあります。

昨年から、宝暦二年（一七五二年）

の『高田御用留』（読み）と『江戸日記』

（十月まで読了）を読んでいます。「御

用留」とは、殿様が不在の場所での藩

の記録のことです。宝暦二年は、殿様

は江戸にて、高田は留守宅でした。

宝暦二年は、九代将軍徳川家重の時

代（吉宗は前年に亡くなっている）、

榎原のいちばん西の集落はカリキド（仮木戸入り口）といいます。神宮の「湯垢離」を榎原温泉「ななくりの湯」を使ったことで都人たちにその名が知れたり、「ななくり」を題材にした和歌が数多く詠われ、清少納言『枕草子』では、「湯はななくりの湯、有馬の湯、玉造の湯」と讀んでいます。



榎原氏ゆかりの射山神社

高田藩は九代藩主榎原政永（当時十六歳）が治めていました。

藩主政永は、昨年来、体調不良により江戸城への登城を控えておりましたが、『江戸日記』によると、五月七日に

「今朝明け七時御出駕、御病氣御全快遊

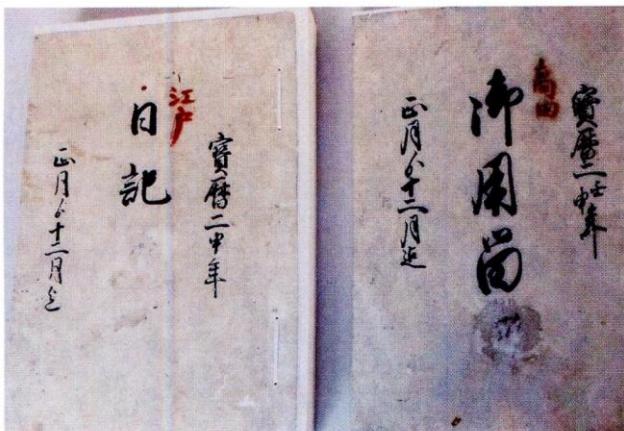
ばされ、御出勤」とあり、全快し登城しています。

『高田御用留』では、五月十一日の項に「殿様御病氣御快然、去ル七日被遊御出勤之旨」と書かれています。江戸から高田への連絡は五日ほどかかることがあります。四百キロから五百キロの道のりを。

ところが、八月末殿様（政永）の弟（豊三郎）が、病氣で亡くなりました。『高田御用留』九月二日の項に「豊三郎御儀、御病氣御養生不被為叶、去月二十七日被遊御遠行旨、今明け七時申来、新島伊右衛門儀、道中四日切

りにて・到着・」とあります。

『江戸日記』では八月二十七日の項に「・豊三郎様御容体御指重被成候付」とあり、居合わせた役人や近習の人たちは、御大中老詰所に様子をうかがいに来ます。そして、八月二十八日に豊三郎様死去の記事とともに、幕府に喪に服する旨の届けを出しています。江戸へ高田の往来は通常はどのくらいかかるのか、高田の町人が藩士に伴



榎原藩日記

われて江戸へ向かう例では、『高田御用留』の八月二十五日に高田を出発したとあります。『江戸日記』九月四日に到着と書かれています。九日から十日が、普通の旅程だったのでしょうか。

旅館

『榎原家史料目録・研究』（上越市立博物館）の「榎原家略系図」によると、藩主政永の兄弟は七名ですが、四名も早く世しています。その中には、政永（幼名・富次郎）の一歳年上の兄（幼名・小平太・政純）も含まれます。たつた七歳で九代藩主になつた政永は、十歳で急死してしまいます。跡継ぎのないまま当主が死亡すると、「お家取り潰

す。江戸から高田への連絡は五日ほどかかることがあります。四百キロから五百キロの道のりを。

ところが、八月末殿様（政永）の弟（豊三郎）が、病氣で亡くなりました。『高田御用留』九月二日の項に「豊三郎御儀、御病氣御養生不被為叶、去月二十七日被遊御遠行旨、今明け七時申来、新島伊右衛門儀、道中四日切

りにて・到着・」とあります。

『江戸日記』では八月二十七日の項に「・豊三郎様御容体御指重被成候付」とあり、居合わせた役人や近習の人たちは、御大中老詰所に様子をうかがいに来ます。そして、八月二十八日に豊三郎様死去の記事とともに、幕府に喪に服する旨の届けを出しています。江戸へ高田の往来は通常はどのくらいかかるのか、高田の町人が藩士に伴

し」になることが多いのですが、一歳違ひの弟（富次郎）を身代わりに据えることに成功（もちろん幕府も黙認）、藩お取り潰しの危機を回避したそうです。

『高田御用留』『江戸日記』は、藩の公式記録であります。また、榎原家の人々の記録もあります。殿様の病世しています。その中には、政永（幼名・富次郎）の一歳年上の兄（幼名・小平太・政純）も含まれます。たつた七歳で九代藩主になつた政永は、十歳で急死してしまいます。跡継ぎのないまま当主が死亡すると、「お家取り潰

す。江戸から高田への連絡は五日ほどかかることがあります。四百キロから五百キロの道のりを。

ところが、八月末殿様（政永）の弟（豊三郎）が、病氣で亡くなりました。『高田御用留』九月二日の項に「豊三郎御儀、御病氣御養生不被為叶、去月二十七日被遊御遠行旨、今明け七時申来、新島伊右衛門儀、道中四日切

りにて・到着・」とあります。

『江戸日記』では八月二十七日の項に「・豊三郎様御容体御指重被成候付」とあり、居合わせた役人や近習の人たちは、御大中老詰所に様子をうかがいに来ます。そして、八月二十八日に豊三郎様死去の記事とともに、幕府に喪に服する旨の届けを出しています。江戸へ高田の往来は通常はどのくらいかかるのか、高田の町人が藩士に伴

資源物は、ガラス瓶・スチール缶・アルミ缶・ペットボトル・乾電池・蛍光灯・プラスチック容器包装・紙製容器包装・新聞紙・雑誌類・段ボールと細分され、種類別にそれぞれ回収されます。

一月二十八日、「NPO法人人工コネックト上越」主催の「パッケージクラフト講座」が、上越市市民プラザ（上越市上橋）にて開かれました。「ごみ問題を考えよう・ごみの量を減らそう」という啓発事業の一環として。

市民プラザは、市民活動の推進拠点となるセンターや、市民が催し物や学習・趣味など独自に参加できる場所が提供される、半官半民の多機能複合施設です。市のセンターとしては、NPOボランティアセンター・男女共同参画推進センター・国際交流センター・環境情報センター・こどもセンターの五機関が入っています。

私がかつてここを利用したケースは、「混ぜればごみ 分ければ資源」をキヤツチフレーズに、上越市でも家庭ごみの分別が行われています。平成二十年からはごみ収集が有料化（ゴミ袋などが有料）されました。「燃やせるごみ」と「生ごみ」（週三回収）・「燃やせないごみ」（月二回収）・資源物（週一回収）の、大きく三つの区分です。

私がかつてここを利用したケースは、「混ぜればごみ 分ければ資源」をキヤツチフレーズに、上越市でも家庭ごみの分別が行われています。平成二十年からはごみ収集が有料化（ゴミ袋などが有料）されました。「燃やせるごみ」と「生ごみ」（週三回収）・「燃やせないごみ」（月二回収）・資源物（週一回収）の、大きく三つの区分です。

①書道の展覧会を見に来た、②NHKのアナウンサーによる朗読の研修会に参加した、③小山美美子さんの独演会（童話の朗読）を聞きに来た、④交際交流協会のお手伝い（外国人の生活ガイドを作る）をした、⑤臨時税務署になり確定申告をした、⑥ランチを食べに来た、などです。この施設のユニークな所は、事業の内

容ばかりではありません。建物にもいえます。移転のため閉店した商業施設

(ジャスコ)をリフォームした点です(B受賞)。

ELCA賞をベストリフオーム部門で

導により約二時間で、バターケッキーの鬼の面ができあがりました。



クッキーの箱から鬼の面

「パッケージクラフト作家」高橋和真さんは、上越市在住（生まれ）で、主な活動は、紙製の空き箱（パッケージ）を使っての作品作りです。「パッケージのバターケッキーの空箱を使つて、「鬼のお面」を作りました。赤い空箱でしたので、赤鬼のお面です。受講者は十一名で、小学生が四名・五歳のお子さんとお父さん・私のようなおばさん五名です。バターケッキーは、未開封で、慎重に箱を開ける所から作業は始まりました。箱を丁寧に展開し、はさみで切り分けたり、折り目を付けたりします。講師の高橋和真先生の懇切な指

この日（一月二十八日）、ブルボン製のバターケッキーの空箱を使つて、「鬼のバターケッキー」を作りました。高橋さんは、赤鬼のお面です。受講者は十一名で、小学生が四名・五歳のお子さんとお父さん・私のようなおばさん五名です。バターケッキーは、未開封で、慎重に箱を開ける所から作業は始まりました。箱を丁寧に展開し、はさみで

切り分けたり、折り目を付けたりします。講師の高橋和真先生の懇切な指示を出さないようにする。

①一つの作品に使う材料は空き箱一つだけとする。
②材料はできるだけ使い切り、ごみを出さないようにする。
③文字部分を途中で切斷しない。(一文字一文字を切り離すのはOK)
④作品完成した後でもすべての文字が読める状態にする。



パッケージクラフト作家の高橋さん

「熊（バーモントベア）」、ネスレの「キットカット」から「蛙（キットかえる）」、モーションパブリッシング（発行）によると、

「パッケージクラフト」として作品を作ったのは十五年ほど前ですが、仕事がボロライト（たばこ）から「口ボット（マルロボ）」、ハウス食品の「生わさび」から「わに（わさびわに）」など。

「雪国の歩き方」

高橋さんの作品例を紹介すると、ハウス食品の「バーモントカレー」から

行つたり、メーカーからの注文（新発売に向けたキャンペーんのため）に応える、などの仕事内容です。

「パッケージクラフト」として作品を作り始めたのは十五年ほど前ですが、仕事がボロライト（たばこ）から「口ボット（マルロボ）」、ハウス食品の「生わさび」から「わに（わさびわに）」など。

軌道に乗つたのは、五年ほど前とか。アルバイトをしながら、ときには親からの援助を頼みながらの日々だったそうです。親から「わに（わさびわに）」など。

二月六日、高橋さんのスタジオ「空のおもちゃ箱」（妙高市朝日町・平成二十一年から）を訪ねました。スタジオのドアの前には、巨大なポカリスエットの「口ボット（ポカリロボ）」が看板替わりに立っていました。室内にはこれまでの作品がずらりと並んでおり、これまでの作品がありました。高橋さんは、現在三十九歳。彼は子供のころから折紙や工作の好きだったとのこと。

(<http://karanoomotyabako.blog11.fc2.com/>)

東北芸術工科大学時代から手がけた、空き箱を使った「工作」の趣味が高じて、今の仕事につながったそうです。展覧会に出品したり、学校に出向いて指導したり、催し物でのワークショップを守るルールが多いほど難易度が上がりますが、制約の中でアイデアをひねり出すことで思いもかけない造形が生まれます。完成度が高くなると、この作品を作るために箱がデザインされたかのような錯覚さえ起させます。

ごみ問題を考える場に、リフォームでよみがえた「市民プラザ」を使い、また、ごみになる運命の空き箱を「パッケージクラフト」でよみがえらせるとは、三題轟のようで、まことにおもしろい企画で、まことに楽しいひとときでした。

先に、足の筋力が衰えてきて、雪の上を歩くのがおつこうになつてきました。今年のような豪雪で、歩道と車道の間に「雪の壁」ができると、いつそう注意深く歩かなければなりません。

雪道を歩くには、コツがいるようですが、足指を開いて歩くイメージと説明してくれた人がいました。圧雪になつた道を歩くときは、スケートをするかのようにすべらせながら歩くと転ばないと、教えてくれた人もいました。深い積雪の道は、なるべく人の歩いた靴跡に足を乗せるように歩きます。しかし、その歩幅が、自分の歩幅より長いときはちょっとこつけいなことになります。もちろん、靴はゴム製の深い溝のあるもの。おしゃれは二の次です。

上越在住の児童文学作家・杉みき子さんの『小さな雪の町の物語』(童心社)には、十五の掌編がありますが、「雪道を歩く」をテーマにさがしていくと、いくつかの物語に出会います。そつ「走れ 老人」の冒頭に、雪道を歩くルールが簡潔に述べてあります。

雪の一本道を通りには、むかしからかわらぬやくそくごどがある。いきあつたら、どちらかがひと足雪の中へ踏みこんで、道を避けること。避けてもらつたら、なるべく待たせないで通りぬけること。

うしろから人のくるときは、急いで歩くか、さもなければ、うしろの人をさきに通すこと。

「ゆず」という短編は、夜の雪道を舞台にしていて、おばあさんと少女の交流が柚の残り香という二クライ演出で表現されています。雪が降るとなにもかも非効率になり、「歩くこと」さえもしんどくなりますが、「ゆず」の世界に免じて、我慢しましょう。

二月十一日の地元新聞「上越タイムス」の一面に、「二十六年ぶり積雪二メートル 上越市高田」の見出しが大きく出ました。

上越市高田の積雪が十日、二メートルを超えた。昭和五十九年から続いた「三年豪雪」時の昭和六十一年以来、二十六年ぶりになる。今後も降雪が予想されることから警戒が必要だ。



南本町一斉雪おろし

年に廃止されました。(三重県では、

同年、尾鷲測候所が廃止)この高田測候所は、上越市の市街地にあり、私が住んでいるエリアです。そして、新聞記事の「高田」というのは、「旧高田測候所」のデータを意味しています。

新聞記事にある「三年豪雪」を私は経験しておりませんが、いろいろの話が伝えられています。もつとも身近な例では、私が住んでいる三階建ての鉄筋コンクリートのアパートでさえも、屋上の雪下ろしをしたとのこと(耐雪二五〇cm)。一階のベランダにはベニヤ板などを張り巡らせて、雪の侵入を防いだとのこと(一階は埋まつた?)。

朝、玄関先の雪かきをしないと外にも雪解けが早かつたかな。

では、「三年豪雪」のときはどうだったのでしょうか。

昭和五十八年～五十九年の冬は

①二九二cm②一四〇日③二三九四一cm

昭和五十九年～六十年の冬は

①二九八cm②一一七日③二〇七二七cm

昭和六十年～六十一年の冬は

①三三四cm②一三二日③一九七五九cm

昭和五十八年～五十九年の冬は、短

降雪期間が長かったようで、また、昭和六十年～六十一年の冬は、短

期間にときどき降つたらしいことが数字からわかります。ちなみに、私が上越市に来て最初の冬は、昭和

六十三年～平成元年ですが、

①一五cm②三七日③二六八cm

というまれにみる暖冬の年でした。うれしい「肩すかしをくつた」のでした。

出られなかつたとのこと。

雪の降り方は、年によつて異なります。インターネット上で「高田測候所の積雪記録」(気象庁のアメダス値を利用した)を見つけました。①最大積雪深 ②積雪日数 ③累積積雪深 の

データがあり、昨冬(平成二十二年秋～二十三年春)は、①一五三cm ②

九九日 ③六四八〇cm でした。昨冬の雪は、一月末から二月に大雪になり

ましたが、二月中旬から暖かくなつて、

雪解けが早かつたかな。

では、「三年豪雪」のときはどうだったのでしょうか。

昭和五十八年～五十九年の冬は

①二九二cm②一四〇日③二三九四一cm

昭和五十九年～六十年の冬は

①二九八cm②一一七日③二〇七二七cm

昭和六十年～六十一年の冬は

①三三四cm②一三二日③一九七五九cm

昭和五十八年～五十九年の冬は、短

降雪期間が長かったようで、また、昭和六十年～六十一年の冬は、短

期間にときどき降つたらしいことが数字からわかります。ちなみに、私が上越市に来て最初の冬は、昭和

六十三年～平成元年ですが、

①一五cm②三七日③二六八cm

というまれにみる暖冬の年でした。うれしい「肩すかしをくつた」のでした。

上越市はスキー発祥の地でもあり、

今年はスキー発祥一〇一周年になります。

スキーを教えたレルヒ少佐の名前を冠した「レルヒ祭」は、二月十一日（前夜祭）十二日（本祭）に開催され、スキー場でのイベント（花火・たまつ滑走・音楽ライブ）のほか、商店街でも冬の味覚を楽しむメニューがあり、一万五千人の参加者がありました。一月から三月にかけて「レルヒマンス」と銘打って、関連のイベントがいろいろ計画されています。その一つ「雪の高田城雪行燈めぐり」が、二月十九日に高田公園（とうろうあんどん）であり、参加しました。雪で作った灯籠や行燈に、夕方（午後五時）から灯りを点すと、雪の公園全体が神秘的な空間になり、辺りが暗くなるにつれて、見慣れているはずの三重櫓（さんじゅうらう）が、おめかししたよう。「雪には灯りがよく似合う」と、公園内を楽しんで歩き、その雰囲気に酔いしました。

三月三日、私が勤務する中学校の卒業式でした。当日、校庭はまだ雪で埋まつていて（積雪約一四〇cm）、保護者のための駐車場を確保するのに苦慮する状態でした。その卒業式の舞台には卒業生の門出を祝うかのように、桜の花が見事に咲いていました。花咲か



高田公園の雪風景

「時空を紡ぐ さきおり」



裂き織り作家松原恵子さん

「音の春」という季語があるそうです。雪国にいると、それを実感することができます。雪国にいると、歩きやすくなりました。歩いていると、野鳥のさえずりが聞こえます。そして、雪解けにともなうかすかな水（桃花水）の音がします。

「裂き織り」とは、経糸に木綿糸、緯糸に古布を細く裂いてリボン状にしたものを使つた織物です。緯糸に裂いた布を使うことで、とても丈夫な物になります。もちろん古くなつた布も再生できます。なぜ、裂き織りが考え出されたのでしょうか。『ものと人間の文化史 裂織』（佐藤利夫著・法政大学出版局）によると、

娘の幼稚園時代のママ友に松原恵子さん（上越市南城町在住）がいます。彼女は「裂き織り」の作家です。彼女は、昭和六十三年（一九八八年）、ご主人の転勤で佐渡に在住のさいに、佐渡の伝統工芸である裂き織り「サッコリ」に出会います。佐渡の相川町技能伝承館にて、講習を受け（一年間）、自前の「機」（ネマリバタ）とともに上越の自宅に戻つてからも作品作りに励みました。裂き織りをはじめ（？）がいたのです。一月末の降雪で、中学校の周りの桜の木の枝がずいぶん折れました。その桜の枝を拾つてきて、上越市美術展に初出品・初入選を果たし、七年後には無監査となります。また二年後の平成二年（一九九〇年）に、上越市美術展に初出品・初入選を果たし、七年後には無監査となります。また、新潟県美術展・現代工芸新潟会展にも入選を果たしています。県内ばかりではなく、全国裂織展においても、入選を果たしています。

「布」とは本来は麻布を指していた。北陸より北では、寒冷なために綿花の栽培には適していないので、衣料纖維の中心は麻であった。（中略）木綿の導入が衣生活にどれほど大きな影響を与えたか、日本列島の南北の気候条件によつて、ワタの栽培地とこれに適さない寒冷地とでは、木綿織りによって生活を豊かにした地域と、なお麻が主要な纖維として残つてゐる地域の差になつて色分けされた。佐渡はワタのできる温暖地と寒冷地の中間にあり、衣生活においても、文化と同じような南北両方の要素が入つて共存してゐる所である。

とあり、木綿が貴重であり、布が貴重であり、古くなつても弱くなつても破れても、とことん使い切つた時代があつたことがうかがい知れます。

佐渡といえば、民話「鶴の恩返し」

の舞台の一つでもあります。この民話
をもとに、木下順二は戯曲『夕鶴』を
書きました。人間の姿に身を変えた鶴・
つうは、命の恩人・与ひようのために
布を織ります。「羽を抜き取つて織る」
姿を見られないように、つまり鶴であ
ることを知られないために「織つてい
る所を見ないで。」と言い置いて、作業
場にこもります。鶴が織つている姿は、
挿絵では「タチバタ」（高機・いすのよ
うな物に座つて織る織機）だつたと思
いますが、松原さんの織り機は、座つ
てするものでした。



ネマリ機

三月七日、松原さんの展覧会を見に、

うな物は座って織る（縫機）かなどと思
いますが、松原さんの織り機は、座つ
てするものでした。

書きました。人間の姿に身を変えた鶴・つうは、命の恩人・与ひようのために布を織ります。「羽を抜き取つて織る」姿を見られないように、つまり鶴であることを知られないために「織つている所を見ないで。」と言い置いて、作業場にこもります。鶴が織つている姿は、挿絵では「タチバタ」(高機・いすのよ

の舞台の一つでもあります。この民話
をもとに、木下順二は戯曲『夕鶴』を

上越市板倉区の「アトリエやま」に行つてきました。辺りは、道格台へと背

「もめん」の原料が生産されはじめます。舶來の高級な木綿ではなく、国産

めたかのように新鮮である。(中略) 経

つてきました。辺りは、道路沿いに背丈ほどの雪の壁が残るもの、春のひざしが暖かく感じられる日でした。こ

す。舶來の高級な木綿ではなく、国産の木綿（生産者）と、「機殿」^{はまとん}の地名（技術者）と、由来する織りの伝統（技術者）と、

商人が行つたようです。

一 ゼして様々に彩なす今日を織り上げてゆく。或る時は、平穏な情緒と、安定したりズムを奏で、或る時は、強靭な意志の力で経糸に秘められた想いを構築していくこともできる。

コーヒーを飲みながら談笑したり、ゆつたりとした時間を過ごしていました。そう昨年は、三月十一日の二時ころここを訪れており、ここで東日本大震災の揺れを経験し、津波の惨状をテレビで見たのでした。

阪もめん 製の商品が販売されていました。江戸で大流行した「松阪もめん」も、明治以降急激に生産が減少し、その技術を守る必要性がでてきたからでしょう。江戸時代の「粹」を代表するといわれた縞模様は、現代でも充分ハイカ

我が家には、松原さんの裂き織りの「額絵」があります。縦十八cm・横二十五cmで、経糸に黒い木綿糸を使い、緯糸に藍色を中心にながら、何種類もの布が層をなし、海から見た「佐渡

ラだと思いますし、残していつてもらいたいとも思います。

島」が描かれています。

松阪は、江戸時代の豪商三井家発祥の地です。江戸の元禄時代ころから、越後屋の屋号で「公反らん」を商い、

「俄物」ごくうらのこよざか意から
いたいとも思います。

海は、藍の無地の濃淡で表現され、
岸辺は白と藍の混じった布で、波打ち

起往屋の屋号で「松阪も&ハ」を商し
その後の「三越」の礎を築きます。江
戸の町で二百軒ほどあつた呉服屋の七
割は松阪商人だつたとか。(三井家のほ
か、小津家・太田家・長谷川家など)。

「織物」というものになぜか惹かれます。染織家・志村ふくみさんは「染め」と「織り」の第一人者ですが、すばらしい隨筆家でもあります。その著書『語りかける花』(人文書院)の「平

山の中腹には、藍色に黄や緑や茶の色の布が混じり草木が感じられます。空は、白っぽい布を多く使い山の稜線のつきりと浮かび上がらせています。

なぜ、このように松阪商人が活躍で
きたのか、いくつかの理由や時代背景
があるようです。

「織り」の項に次のような文章があります。

「裂き織り」は、実用ばかりではなく、織る」とことで、また素材や色を「組み合わせる」とことで発生する「偶然性

十六世紀初頭・室町時代の後期に「ワタ」の種が伝来し、栽培に適した三河（愛知）・河内（大阪）・伊勢（三重）などで、

織物の中で、平織りは最も平易である。空気や水の如きであり、始めであり、終わりである。何十年やつても、今はじ

こ「デザイン性」にも注目が集まっています。

御祝い

永六輔、落語界にうといわけではない。

生家の寺の門を出て、左の突き当りは寄席の「鈴本」、右へ行けば「浅草演芸ホール」、途中の白鷗高校は、生徒全員に三味線が用意されている。近所の銭湯の脇下がり、売れない芸人さん達が噂話をしている。そんな町で育つた。永六輔、落語界にうといわけではない。

寄席好きの父に連れられて、時には須田町や、人形町に出かけ、可樂や三木助に間に合った。岡本文弥の一言、「戦争はいやでござります、あれは散らかしますから。」は忘れられない。談志の小ゑん、小三治のさん治もおぼえている。

好江姉さんに頼まれて、柳昇師匠から「アタシを師匠にさして下さい。」と云われ、その後弟子入り。昇太を「あにさん」と呼ぶ破目にもなった。

だから落語にうといわけではない。父が憧れていた「席亭」を実現して、親孝行も出来た。沢山の前座が真打に育つていった。だから落語にうといわけではない。

その永六輔が「瀧川鯉橋」を知らなかつた。この頃落語に興味を持ち始めた姪がいるので聞いた。「鯉橋師匠とは、昨日よりもおとつい明日よりはあさつて」という時間枠に居そな人。レコードでいうならB面の気配を持つひと。今度紹介します」僕が実家へ帰った時、その男は住職のように出迎えた。たしかにB面の風情だった。

一方、永六輔は転倒が続いてパーキンソン病。早くなりハビリから卒業して、パーテイにも参加したい。リハビリ仲間の野坂昭如サンから云われたことがある。「時代が怪しい。これからは、米どころに親戚があることが大切だ。」

鯉橋に出身を聞くと「越後・直江津」なんという目出たい結論。やれ目出たい永六輔、落語界にうとい。メデタイ。

藤田香代

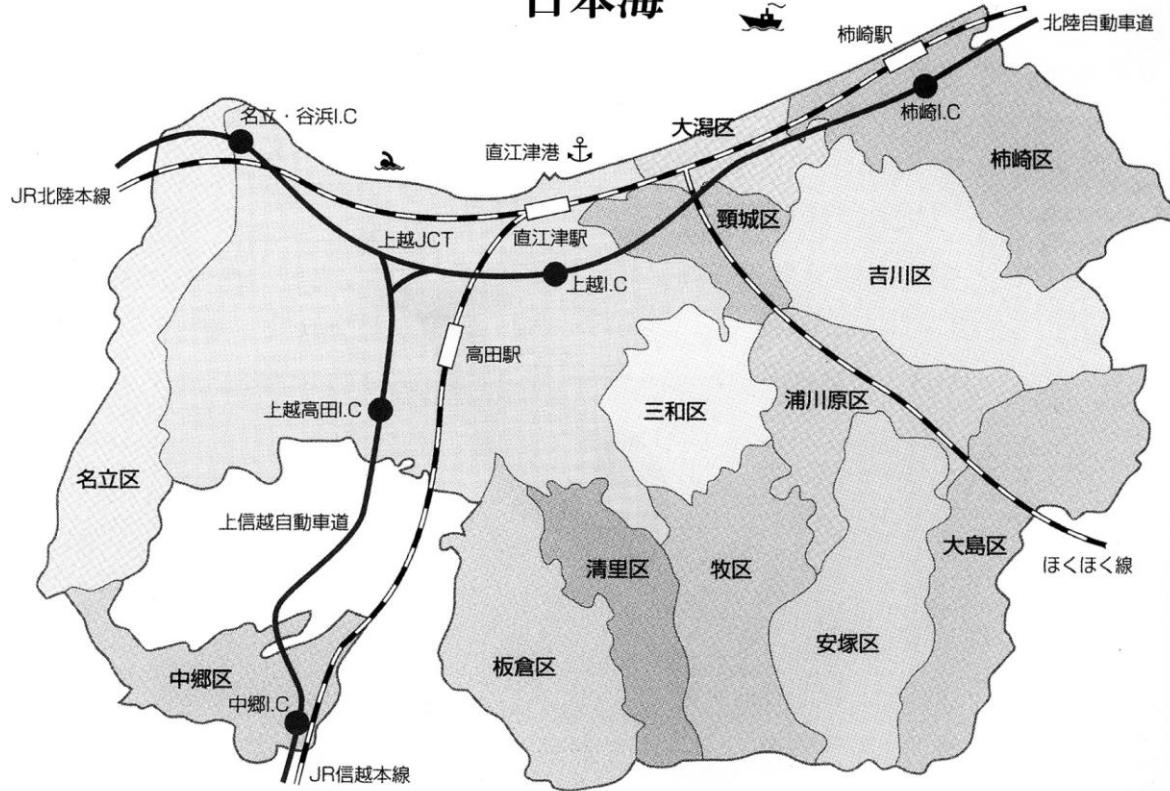


丁ネットより贈った楽屋暖簾の染色「謙信褐紅紫」について解説する理事の藤田香代さん

上越市マップ



日本海



面積 973.54km² (シンガポールの 1.4 倍)

人口 203,899 人

世帯 71,477 世帯

(平成 22 年国勢調査)

編集後記

遅くなりましたが会報33号をお届けします。

会報制作に皆さまから写真をお借りしていますが、きれいなものが多く白黒では申し訳ないといつも思っていました。しかし、カラー印刷になると倍近い費用が掛かってしまいます。

いつも印刷をお願いしている会社は一度に8ページ分の紙に印刷しています。つまり裏表16ページが同時印刷となります。会報の表紙は何時もカラーですから、用紙を表紙の紙と同一のものにすると頭8ページと後ろ8ページ（一台分）はカラーにしてもそれほどお金はかかるないことになります。

そこで、今回は試みに16ページのみの部分カラーとし、カラー写真の多い記事を配置しました。

そんな訳でこれまで岡村さんが苦労して完成したページ配置が大きく変わってしまいました。

どんな感じになるか不安半分で出来上がりを待っています。

今回、編集長の岡村博巳さんは肺と腎臓にガンが見つかり入院中です。今回会報の発行が遅れたのは岡村さんの入院もその一因です。岡村さんは既に2か月抗がん剤治療をしていますが、元気でほとんど毎日電話で話しています。一日も早く復帰してくれることを心待ちにしています。

和久井 博



●発行

ふるさと上越ネットワーク事務局
〒 150-0043
東京都渋谷区道玄坂 1-16-6 二葉ビル 6 階 -6B 号
TEL:03-6415-6277 FAX:03-6415-6299
E-mail:jnet_tokyo@albatros.co.jp
URL:<http://www.joetu.gr.jp/>

本府担当 (自治・市民環境部 共生まちづくり課)
〒 943-8601
新潟県上越市木田 1-1-3
TEL:025-526-5111 (内 1406) FAX:025-526-8363
E-mail:j-net@city.joetu.lg.jp

【皆様からの情報をお待ちしています】 TEL:03-6415-6277 (J ネット事務局)
